

宮城県石巻・女川・東松島方面視察ツアー(2019.8.29～30)

昨年に引き続き、ある団体から誘われ、今回東日本大震災の爪痕が残る宮城県石巻・女川・東松島の視察ツアーに参加することにした。あの震災の状況は、テレビやいろいろな媒体で報道されていた部分についてのみ知りえていたが、一度自分の目で確かめてみたいという思いもあったことが参加の理由だ。

今回は1泊2日のツアーで、スケジュール的にはかなりタイトで強行軍になることが予想されるがついていけるだけついていってみようと思う。

I 石巻駅に集合し市内視察

東北新幹線で仙台駅へ、そこから仙石東北ラインに乗り換え石巻駅に10:14着。

到着してそのまま石巻市復興事業部市街地整備課の方々の案内で、立町二丁目5番地区に向かう。立町通りは、各銀行が立ち並ぶメインストリート。しかし、震災前から賑わいを失っていた商店街は、震災で一層の打撃を受け、現在も空き店・空き地が目立つ。そこで、こ

に大正5年に建てられた平屋建ての木造和風建築物・土蔵と美しい庭を所有する「秋田屋」と周辺の地権者が参加して住宅・店舗等を再開発する計画を立てた。そして、2015年に着工、



2016年9月に竣工した。ビルの名前は「きょうまち」、店舗を所有・運営する会社は「あす街」、立町通りに面した主棟にはライフスタイルショップの「石巻 ASATTE」(2016年11月25日オープン)が店を構える。「石巻 ASATTE」は「ちょっと先の未来の、素敵な暮らしを提案する」というコンセプトで、地場産品を中心とした食品販売のお店、オープンカフェも備えたレストラン、生活雑貨や県内のクラフト作家が手掛けた作品を販売するお店でスタートした。しかしながら、現在は食品販売のお店は「いしのまき元気市場」に移り、レストランは家賃滞納で営業不能になっている。(このプロジェクトでは国から3年間、家賃の50%が受けられる) 明るくファッション性あふれるお店なのに、残念な気がする。

この店舗の上層部は災害公営住宅(防音・断熱性に優れ評判が良いとのこと)として利用し、裏には定期(70年)借地権付き分譲住宅を「デュオヒルズ石巻」として建築・分譲し、駅まで5分、

市役所・銀行・クリニック等にも至近で、住みやすい街との評価を受け、早期に完売したそうだ。

次に向かったのは、中央三丁目 1 番地区。復興再開発事業の第 1 弾の再開発事業。石巻モデルに従い、通り沿いに棟を配置し街並みをつくるとともに、3階に居住兼避難フロアを設け、そこを中庭として住宅を設置した。ビルの名称は「石巻セントラルビル」、住居は「石巻テラス」、低層部の店舗は「石巻スクエア」と名付けられた。敷地が不整形なため、街区の内部は 1 及び 2 階を駐車場とし、3 階以上を住戸としているという。

3 階以上を住戸としたのには理由がある。住居は人工地盤がある 3 階(6m)以上とすることで万が一の地震や津波・高波にも備えられるからなのだ。「石巻スクエア」の店舗としては、コンビニ、学習塾、美容室、和食料理や、カフェ、鯛焼き屋が入居している。

外観を見学しながら説明を受けたが、時間がないので次の目的地に移動しようとメインストリートに出ると、左手に妙に目立つ建物が現れた。市役所の方に聞いてみると、それは「旧かんけい丸商店」という建物だそうだ。石巻市のホームページには、『観慶丸商店は、石巻で最初の百貨店として建てられ、後には陶器店として約 80 年にわたり市民に親しまれてきました。木造でありながら、外壁を多種多様なタイルで覆い、スペイン瓦や丸窓、アーチ窓を有する外観は洋風建築を思わせ、この建物の大きな特徴となっています。街角に建ち、通りに面した外観がそのまま広告となる「看板建築」であり、その姿は港町石巻の繁栄の象徴として、石巻の歴史を語る貴重な建造物といえます。平成 25 年、本市に建物が寄贈され、平成 27 年には石巻市有形文化財に指定されました。平成 29 年 11 月 3 日より、石巻の歴史・文化についての展示施設と文化交流のための貸スペースを併設した文化発信拠点として再開館しました。』とある。

「観慶丸本店」は現在別の場所で営業を続けているが、江戸時代から続く石巻の陶器店。陶磁器、ガラス、漆器などのほか、アフリカやアジアの手工芸品など生活雑貨・日用品も扱っているそうだ。じっくりと見学したいが、残念ながら時間的に無理そう。



ちょっと話がそれてしまったが、次の目的地の「デュオヒルズ石巻マークス」に向かう。竣工間近であったが、この周辺では一番高い 12 階建て高層マンションで全戸南東・南西向き、JR 石巻駅まで約 10 分の好立地と謳われている。主に 3LDK(67㎡~82㎡)で価格帯は 1,600 万円~2,700 万円、68

戸の分譲タイプで、他に非分譲の店舗および診療所 7 区画が入居予定とのこと。モデルルームの間取りや写真を見ると、若い世代に好まれそうな感じがする。



次に向かったのは、「デュオヒルズ石巻マークス」から少し海側にある中央松川横丁の店舗+住宅(シェアルーム=COMICHIの家・住戸)の複合ビル「COMICHI 石巻」。ここは、2016 年に日本都市計画学会計画設計賞を受賞したそう。授賞理由は、「横丁」という身の丈スケールによる空間整備を具現化することでスピーディーにまちなか再生の動きを興したこと、また、地域とそこに

営み集う多くの人々の資源や可能性を引き出すことで、復興・活性化に寄与したことだそう。

ここも外からざっと眺めただけで、次の目的地「いしのまき元気いちば」に向かう。

かなり、お腹も減ってきたので「元気食堂」でのランチが楽しみ。ここは、かわまち交流拠点整備事業の一環としての施設で生鮮マーケット、公共施設、広場、駐車場等により形成されている。河口近くの北上川の堤防(高さ 4.5m、幅 17 m、延べ 200m)の横に位置し、堤防に登るとすぐ横の中州に宇宙船の形をした「石ノ森萬画館」の建物が見える。この「石ノ森萬画館」は仮面ライダーやサイボーグ 009 などで知られるマンガ家石ノ森章太郎のマンガミュージアム。館内には貴重な原画はもちろん、作品の世界を立体的に再現した展示やアトラクション、オリジナルアニメの上映など石ノ森ワールドを満喫することができ、「平成ライダー」のマスクの展示や仮面ライダーに変身できる新アトラクション、サイボーグ 009 の世界を楽しめる。そう言えば、町のところどころに仮面ライダーのフィギュアを見かけたが、これなんだと納得。



堤防から一旦降りて建物の 1 階にある「いしのまき元気いちば」の売り場の豊富な水産加工品や物産品を見て回り、2 階にある「元気食堂」へ。そこで、食堂で人気の定番メニューの元気丼(1250 円:元気いっぱいの新鮮なネタが満載の海鮮丼)にありつく。お腹が減っていたこともあり、美味しくあつという間に平らげる。でも、そ



の余韻を楽しむ間もなく席を立ち、再度堤防へのぼり、隣にある公共施設の「石巻市かわまち交流センター(通称:かわべい)」を急いで見学。そこには、市民交流ホールを含む市民交流スペースやインフォメーションスペースがあり、市民の交流の場となっている。

12:26 発の JR 仙石線で女川に向かうため、ここからタクシーを呼んで石巻駅に向かうことになった。今日は石巻に約 2 時間の滞在だが、また明日市内の別の場所を見学する予定だ。

II 女川駅から災害復興住宅・仮設住宅へ

12:49 に JR 女川駅に到着。駅のすぐ横に今日宿泊するトレーラーハウスのホテル・エルファロが点在している。下車後、聞いてはいたものの女川駅の駅舎を目の当たりにするとその大きさ、斬新さにびっくりさせられる。

3.11 の地震による 14.8m の津波で町民約 1 万人のうち

827 名もの命が失われ、建物の約 8 割が被災した女川町の復興計画のシンボリック的存在として位置づけられ建設されたのがこの駅舎だ。この駅舎は、世界的建築家の坂茂(ばん・しげる)さん



さんが設計し、町の鳥・ウミネコが羽ばたく様子を「復興に向けて羽ばたいてほしい」とイメージした真っ白な大きな屋根が特徴の建物。



本日の参加者が集合したところで、女川駅舎とその中に併設されている「女川温泉ゆぼっぼ」の視察。女川町役場の方からの説明を受ける。この駅舎は、元の駅より 200m、約 9m 高い土地に建てられているとのこと。

最初に、3 階の展望フロアへ階段を上る。屋根の天井を見上げると、木材を組み合わせてできた格子模様が見事だ。そこから南を見ると、女川レンガみちの先に海が見える。お正月の元旦に初日の出を拝みに来ると、ちょうど正面から朝日が昇るといって年一度の絶好のスポットだろう。また、北の方の山側に目を転じると、女川駅のホームとトレーラーハウスの色とりどりの「ホテル・エルファロ」を見ることができる。展望フロアの真下には、足湯もある。(後でお湯を触ったらかなりぬるめだった)

一旦階段を下り、1 階のエントランスから町営の温浴施設「女川温泉ゆぼっぼ」へ。その 1 階には、震災復興関連の書籍コーナーや貴重な展示物、町の様々な活動を紹介するギャラリーと女川の特産品を取りそろえた物産コーナーがある。また 1 階から 2 階にかけてのベンチ等の設備は、坂茂さ





んが特別に作った紙の製品・紙管で造られている。デザイン的にもすっきりしておりかつ非常に硬くて丈夫だそうだ。2階には休憩所があり、結構広くゆったりした造りで、さらに休憩所の壁面には、日本画家の千住博氏とデザイナーの水戸岡鋭治氏の二人をアートディレクターに迎え、公募で集まった917点の花の絵と千住さんの絵を合わせたタイルアートが描かれている。この時間の見学はここまでで、浴室は宴会後の夜の時間のお楽しみ。



関係者全員駅前広場に集結し、タクシーに分乗して災害公営住宅の視察に移る。最初に向かったのは、災害公営住宅で長年町民に親しまれて活用された陸上競技場の跡地に建設された住宅だ。平坦な土地が少ない町では、少しでも早く被災者が安心して暮らせる住宅を整備するため、止む無く高台にあった陸上競技場を解体し平成26年(2014年)3月に完成・入居した



という。8棟200戸の集合住宅タイプ(2K~4LDK)の災害公営住宅は、宮城県内での最大級の規模。こういったことも含め女川町役場の方から説明を受けながら、空いている部屋を見学する。部屋は、ぜいたくな造りではないが住みやすさに重点を置いたレイアウトになっている。住宅の階層も3階と4階建てで、これは元々戸建て住宅で生活していた町民に配慮したものだそうだ。また、コミュニティの空間を重視する観点から

「マルシェ広場」から「みんなの道」を経由して「お祭り広場」を配したり、「コミュニティプラザ」(集会室、ふれあいカフェ等)も配置している。被災の後、狭い仮設住宅で我慢を重ねてきた町民にとっては天国だとの声も聞こえていたようだ。

ただ今後の課題として、高齢化に伴う空き室対策が発生、今後の入居希望者の家賃設定等の解決策が必要になりそうだという。

次に、体育館を跨いですぐの町民野球場応急仮設住宅(コンテナ仮設住宅)に向かう。ここは、元々野球場でスコアボード等はそのままになっている。現在は用済みになっており、解体を待っている状態だ。この仮設住宅は、震災後すぐに駆けつけてこのプロジェクトを推進した建築家の坂茂氏の力によるものだそうだ。被災者でごった返す避難所に、紙管とカーテンでプライバシーを確保しつつ、



町を説得して、平地の少ないこの町に海上輸送用のコンテナを使った多層型の仮設住宅を提案したのだ。これにより、①3階建てが可能で、従来の平屋建てプレハブ住宅より狭い土地に多くの戸数が確保できる。②住棟間隔が大きく(11m)とれ、駐車場やコミュニティ施設が配置可能で、プライバシーも保てる。③プレハブ的な建設工程で、2~3か月で住棟が完成する。④コンテナを一つ置き(市松模様)に積むことにより、コンテナとコンテナの間に全面ガラスを入れ、開放的なLDKの部屋ができる。⑤優れた耐震性、断熱性、遮音性を確保できる。⑥仮設住宅として使用後には移設し、他の用途に使える。⑦住むことが楽しくなるデザイン。をコンセプトにした仮設住宅が平成23年(2011年)11月に完成させることができた。コンテナの組み合わせにより、2階建3棟、3階建て6棟、189戸で、6坪、9坪、12坪の3タイプの住戸となった。何分にも狭いため、収納不足を補う備え付けの壁面収納がボランティアの手により制作されたり、コミュニティを確保するため、中心的な広場として大きなテントが設置されたマーケット(坂本龍一氏寄贈)が建設され、隣接して集会場と子供アトリエ(千住博氏寄贈)が配置されている。また、子供アトリエには、坂茂氏の紙管が随所に使われている。



染みた。

すでに退去されたあとの部屋を除いたが、震災後の応急仮設住宅なので仕方がないのかもしれないが、本当に狭く、長く生活できる場所ではないと思われ、被災者たちのご苦労が身に染みた。

すでに退去されたあとの部屋を除いたが、震災後の応急仮設住宅なので仕方がないのかもしれないが、本当に狭く、長く生活できる場所ではないと思われ、被災者たちのご苦労が身に染みた。

Ⅲ 女川レンガみち⇒ハマテラス⇒女川町まちなか交流館

復興住宅からまた女川駅前広場に戻る。現在15時。これより、上條慎司氏(小野寺康都市設計事務所・レンガみちで結婚式を挙げた)から「女川駅前レンガみち周辺地区」の現地説明を受ける。まず女川駅舎の3階展望台に上り、そこから海に向かって赤いレンガみちを見下ろすとレンガ色がひととき映える。



ここを設計したときの苦労話を交え、「レンガみち」を歩きながら意見交換。この地区は女川駅前広場から女川湾に向かって伸びる「レンガみち」を軸として、商業・業務・交流・公共施設が集積するにぎわい拠点として位置づけられているという。この拠点のコンセプトは、「海が見える公園のまち」で「シーパルピア女川」と名付けられている。「シーパル」とは町のシンボルマークのシーパルちゃん(町の鳥のウミネコ)からとったもので、シーは海、パルは友達、ピアは埠頭の合成語だそう。県内外の人が気軽に訪れ、集い、語り合う場をつくることを目的に、海を見ながら集いにぎわえる町の“居場所”を形成し、駅前広場(レンガの広場)、レンガみちを介して



日常生活と非日常(観光等)の交流が生まれる場造りを心がけたという。また、いざという時には、レンガみちは安全な高台へ向かう明確な避難路にもなるそう。レンガみちの両側にはいろいろなタイプのテナントの店舗、ミニスーパー・蒲鉾屋さん・地ビールの店、工房、飲食店等が並んでいる。一番先には「ハマテラス」という観光物産施設がある。ここでは、水産物を中心とした特産品の販売、旬の魚介類やスイーツの飲食ができる。また、この「ハマテラス」という名前は、軽井沢の星のやにある「ハルニレテラス」をもじったものらしい。それというのも、この建物を設計したのがその張本人の東梨恵さんだという。「ハマテラス」では、ウッドデッキのテラスでバーベキューができるのも楽しみの一つ。

ここから海に向かって国道 398 号線を渡ると、現在整備中であるが、「メモリアル広場」と「イベント広場」となる。「メモリアル広場」には、あの津波で流され倒れた交番を、そのままの姿で震災遺構として残すことになっている。実際に間近で見ると、こんなに堅牢な交番の建物をなぎ倒してしまう津波の恐ろしさがひしひしと感じられる。この先の海側は、観光交流エリアとして整備されつつあるが、まだ形を成していない状態だ。ここは、町の魅力の向上が期待されているエリアだが、生活に直接かからわらない部分は、なかなか進まないのが問題。



現在だいたい 16:30。次に向かったのは、女川商工会の方々から運営面を中心にお話を伺う「女川町まちなか交流館」。ここも、レンガみちに面しており、「居心地の良い、まちの居間となる、賑わい交流拠点」をコンセプトとした、町民や来町者が気軽に立ち寄れる施設で、10mの高さの開放感のあるロビーや多人数収容のホール、会議室、ドラムセットを完備した本格的な音

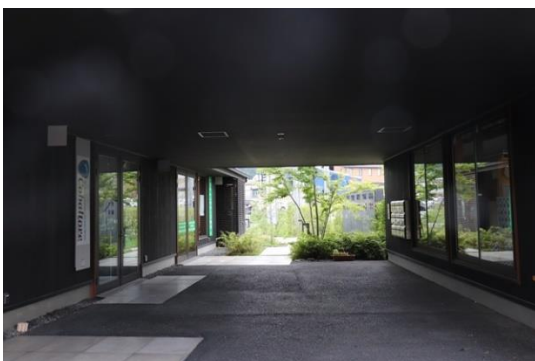


楽スタジオ、調理室、多目的室、キッズコーナーを備え、商工会も入っている。その多目的室で、商工会・まちづくり推進役・磯部哲也氏から、説明を受ける。震災の1年前の2010年6月、仙日本社の地銀・七十七銀行のシンクタンクが、女川町は30年後にはこのままでは、当時1万人の人口が30年後には4割減少するとの予測をだした。その提言に町は危機感を抱き、商工会長を

筆頭に約20名のメンバーで「女川まちづくり塾」を立ち上げ、町の産業・教育・福祉・まちづくり等について議論を始め対策を協議していたそうだ。そして、2011年3月11日夜、その最終報告会を実施するという矢先に東日本大震災が発生、津波による大きな被害を受けたのだ。しかしながら、災害を受けた直後でもこの素地があったことから、商工会長や水産業のトップはすぐに町の人たちを集め、被災1か月後の4月に女川町復興連絡協議会(通称:FRK)を立ち上げた。そして、「復興には10年20年かかるから、還暦以上は口を出すな。50歳以上は、口は出しても手を出すな」という商工会長の意向のもと、30代40代が今後のまちづくりを担うべく町の再生を目指して議論を開始、1年もたたないうちに構想ができたという。その構想の主眼は市街地の嵩上げ、国道を防潮堤代わりにした津波対策という防災機能を確保しつつ、海への眺望を生かしたまちづくりだそうだ。女川の人たちは、皆さん前向きだ。被災後に詠まれた小学生の詩、「女川は流されたのではない / 新しい女川に生まれ変わるんだ 人々は負けずに待ち続ける / 新しい女川に住む喜びを感じるために」に象徴されていると感じる。それに基づき、まちづ



くりワーキンググループを立ち上げ、その中の女川みらい創造(株)が設立されて女川駅の開設、線路の復旧、レンガみち、ハマテラスのオープンにつなげたのだ。その後、復興祭を含めいろいろなイベントを開催したりして、商工会だけでなく町以外の方々からも多くの支援を受けつつ徐々に復興してきている。



しかしながら、5年も経過してみるといくつかの課題も見えてくるという。一つは、レンガみちのテナントの入れ替え。空きがないように新規の出店誘致を町だけでなく、幅広く受け容れたり、観光客に喜ばれるような生活と直結しない目玉のテナントの誘致も考えること。それから、事業を継

続している人員の固定化の問題。若い人たちや外部の人間を引き込むことで町の活動人口を増やすひいては一人でも移住者・定住者を増やすこと。また、レンガみちだけでなく、病院の裏側にある鷲神浜の商業エリア(現在スーパーマーケットができる予定)の活性化を図ること。それと最後に、シーパルピア女川の先の観光交流エリアをどのようにつなげていけるかまた、未活用のスペースの活用方法をどうするか?や、平日対策・休日対策もそうだが、今できることを他の被災地より先に進んだまちづくりを目指していきたいとのこと。



ここで説明は終了。18時から「居酒屋 ようこ」で懇親会が行われるので、一旦荷物を置きに「ホテル エルファロ」にチェックイン。

IV 懇親会「居酒屋 ようこ」「女川温泉ゆぼっぼ」「ホテル エルファロ」女将の話

懇親会の帰りに「女川温泉ゆぼっぼ」に入浴するので、タオルや着替え持参で懇親会会場の「居酒屋 ようこ」に向かう。「女川温泉ゆぼっぼ」の営業時間の関係もあり、20時までに関に合わせる必要あり。とにかくこの強行軍なので、お腹はペコペコ、のどはカラカラで懇親そっちのけで食い気ばかり。でも、美味しい魚介の家庭料理に舌鼓を打ちながらいろいろ情報交換し、楽しい時間もあっという間。入浴タイムがせまってくる。

会場を出て、女川駅舎にある「女川温泉ゆぼっぼ」に向かう。1階の入口で料金を支払い、いよいよ入浴だ。この温泉は、ph8.8の低張性アルカリ性温泉で、肌をつるつるすべすべにしてくれると成分表にある。浴室は、千住博氏による「霊峰富士」や「泉と鹿」の作品に囲まれ特別な雰囲気がある。しかも、これらを眺めながら浴槽に浸かるのは最高の気分になる。出るのも惜しいのだが、この後21時から「ホテル エルファロ」女将の話が聞けることになっているので、引き上げざるを得ない。徒歩で数分のホテルに戻る。



「ホテル エルファロ」は、東日本大震災で被害を受けた4軒の旅館経営者が共同で立ち上げたJR女川駅のすぐ横にあるカラフルなトレーラーハウス(40棟63室)が並んでいるホテル。





一旦部屋に戻り、改めて部屋を見回すと、コンパクトではあるが、普通のツインルームで快適だ。カジュアルな服装に着替えてフロント前の食堂棟に集合。女将の佐々木里子さんから約1時間にわたってお話をしていただく。佐々木さん(昭和43年生)の生い立ちから、旅館業に携わるようになった経緯、さらに3月11日の大震災と大津波の生々しい描写。この震災で、ご両親を失ったそう。それでも、目の前で県内外から復興を目指して、ひきも切らずに出入りする作業員の宿泊施設がないため、仙台から車で2時間もかけてきているのを見るにつけ、「何とかもう一度旅館業を復活させなければ」と決意。それで、佐々木さんと同様に旅館を流された計4人の仲間と、いろいろな人の知恵や力を借り、再建計画が動き出す。津波の跡地には新たな建築ができない中、思いついたのがトレーラー

ハウスだったのだ。それについても、いくつかの障害があったが何とかクリアでき、2012年12月のオープンにこぎつけた。ただ、ホテルの場所は町の高台の清水地区で、駅から約1.5km、徒歩で40分かかるところ。したがって、「駅から遠い」とか「繁華街から歩いて帰れない」等の苦情が寄せられたり、以前の旅館との違いから苦戦し始めた。2015年6月、そこに救世主の石巻市出身の田中雄一朗氏が現れるのだ。田中氏は、石巻グランドホテルやリゾートホテルのエクシブ琵琶湖でのフロントマンとしての経験を生かして、接客や集客のノウハウをつぎ込んでくれたのだ。その後、駅周辺の土地整備が進み、現在の場所に2017年8月リニューアルオープンすることができた。「エルファロ」はスペイン語で灯台という意味で、自分が被災地に明かりを灯す灯台になりたいという発想から名付けたそう。明るくポジティブな女将の佐々木さんだが、被災のシーンを語るとき、さすがに声を詰まらせていたのが印象的だった。最後に、応援に来てくれた歌手の八神純子さんから贈られた歌「1年と10秒の交換」という歌は、自分の気持ちを歌ってくれた歌なのでぜひ聴いて欲しいと締めくくった。



部屋に戻り、翌日の予定をチェックしようとしたが、すぐに今日の疲れと少しのアルコールのせいで眠ってしまった。 「V」に続く